

Views from Orienteering

村越 真



OMMでは一晩を過ごす野外生活技術も要求される。写真は、イギリスの大会で野営を終えて二日目の準備を始める村越・田島ペア

OMMの世界

前号で紹介したオリジナル・マウンテン・マラソン (OMM) の日本大会が、11月末に開催された。OMMは二日間に渡り長距離のポイントオリエンテーリングをするだけでなく、夜は自力で運んだテントや生活用具で過ごすという、ナビゲーションに生活技術が加味されたアウトドアスポーツである。

このイベントの意義はいくつかある。オリエンテーリング界から見ると、トレイルランニングからさらに一歩オリエンテーリングに近いアウトドアスポーツが出現した点が挙げられる。これまでも、トレイルランニングとオリエンテーリングの中間にロゲイニングがあった。しかし、時間が来れば終了するスコア型式であるロゲイニングに対して OMM は (スコア型式も併設しているが) ポイントオリエンテーリング

である。ナビゲーション課題を着実に解決しなければ、フィニッシュにたどり着けず、成績もつかない。「なんか面白そうなアウトドアイベントが出てきたぞ」的なノリでエントリーした人たちが、地図読みやナビゲーションに関心を高め、講習などにこぞって参加するという現象が発生した。日本で実施されているロゲイニングよりも、さらにエキстрリームな OMM を通してナビゲーションスキルの奥深さ、面白さを知るチャンスが広がった。これをどうオリエンテーリングの普及・発展に生かせるかが、オリエンテーリング界に問われている。

アウトドアスポーツ全体から見ると、生活技術の必要性が強調されると同時に、それを実践する機会を提供した意義を挙げられる。トレイルランニングでも 100km を越える長距離レースが増

えた。そこでは基本的に参加者は飲料と行動食を持つが、エイドや休息所の提供によって、走ることに専念できる。しかし、イベントでない時に自然の中に入ろうと思えば、食料はもちろん、何かあったときに自分の身を守るスキルが求められる。これまでのトレイルランニングでは、この点への意識が低かった。OMM を通して、自然の中での生活技術やリスクを回避する技術の重要性がクローズアップされた。兼ねてからオリエンテーリングにおいても、自然の中で活動する割には、自然の中でのリスクを考えたり、それに備える発想が乏しいことが気になっていた。OMM は改めて自然の中のリスクとそこで自分の身を守ることの重要性を気づかせてくれると同時に、楽しみながらそのスキルを磨ききっかけを与えてくれると期待している。

アウトドアスポーツへの規制

21世紀に入るまで、オリエンテーリングと冬のクロカンを除けば、自然の中でおこなわれる本格的な競技スポーツはほとんどなかった。2005年ごろからトレイルランニングがブームとなり、アウトドアでタイムを競うスポーツイベントがメジャーなものとなった。しかし、急激な発展はひずみをもたらす。2014年はそれが大きくクローズアップされた年となった。

すでに東京都や環境省は、トレイルランニングについてのルールづくりに着手していた。環境省のルールは国立公園に限られたもので、しかも、対象はイベントを対象としたものだ。一方東京都のルールはイベントだけでなく、個人として走るトレイルランナーもルールの対象となっている。また2月には鎌倉周囲のハイキング道の保全団体から、鎌倉市に対してトレイルランニングを規制する条例制定への陳情がなされた。鎌倉周辺は日頃からハイキングや散歩で山に入る人が多い。一方、東京や横浜から至近距離にある上に適度な起伏があり、多くのランナーが訪れている。スピードが異なるランナーが歩行者の多いトレイルを走れば、軋轢が起これるのは自然の成り行きであった。

鎌倉で活動をするランナーや関係者は、条例制定への動きに対して行動を

起こした。鎌倉トレイル協議会を立ち上げ、自主ルールの策定と、その啓発へと活動を始めた。その成果は「鎌倉はこう走ろう」と名付けられ、内容はフェースブックなどで知ることができる。

東京都のルールづくりは、当初トレイルの新種の利用者であるトレイルランナー、ペット連れ、MTBを対象としたものだったが、議論の過程で、マナーや安全についての意識についての問題の多くは登山者も共有していることから、「全ての人へ」というカテゴリーが加わった。当初案では、MTBについては、乗り入れ禁止を単純に謳っていた。私も策定委員の一人だったが、委員の中にMTB利用に詳しいものがいなかったものも一因であった。このルールのパブリックコメントの募集に対していち早く動いたのが、西多摩地区でそれ以前から地元との関係づくりをしていたMTB友の会であった。「動員」をかけて400を超えるパブコメを寄せた上で、MTBの立場から意見を伝える場を設定してほしい旨の申し入れがあった。

東京都も、それに対して柔軟に対応した。一方の友の会も、「成果を勝ち得た」的な捉えではなく、「ルールで規制されるには規制されるだけの理由がある。それについて自分たちも連帯して対応していく」という、成熟した活動者としての姿勢を貫き、自主ルールの

啓発や普及について積極的に行動している。東京都も、今後の事態の進行によって柔軟にルールを見直していくことを基本姿勢として示している。

占有空間ではないトレイルにおいてスポーツを楽しむ上で、ある種の規制があることはやむを得ないし、地権者の（利用を許している）善意を考えれば、それに応えていくのは利用者としての当然の義務でもある。一連の動きを見て感じたのは、当事者双方が冷静に事態を捉えると同時に、自分たちに何ができるかを考え、またそれをもとに実践的な活動を行い、一定の成果が生まれた点である。

現在のオリエンテーリングは規制が問題になるほどの競技人口はない（かつて、オリエンテーリングも苦情の対象となった時期がある）。しかし、ここ数年公園利用のスプリントで問題が発生したり、地権者の理解が得られず大会が開催できなかったといった事例を見るにつけ、一連の事態は、私たちがこれからもオリエンテーリングを楽しんでいくために何をしていかなければならないかについてたくさんの教訓を提供している。

（村越 真）



OMM -- 野外行動のリスクマネジメントの基本が二人ペア。常に一緒にいることで、互いの安全を高め合う。